

Views from Orienteering

村越 真

自然公園利用ルールの衝撃

3月に環境省と東京都自然公園局という二つの組織が、それぞれ独自に自然利用についてのルールを制定した。環境省は所管する国立公園でのトレイルランニングイベントの実施についてのガイドラインであり、個人の行動に関するものではない。一方、東京都は個人利用者も含めた自然公園利用のルールである。

いずれも、制定の理由は、トレイルランニングにある。2005年以後多くの愛好者が増加し、トレイルランニングイベントやトレイルランナーが雨後の竹の子のごとく増えた。それが環境に影響を与えたり、登山者やハイカーとコンフリクトを起こしている実態がある。

ガイドラインやルールには、彼らが所轄する自然公園におけるコンフリクトを軽減しようとする意図がある。確かに、数百人から時には1000人を越える人が狭い登山道やトレイルを走るトレイルイベントは自然への影響が懸念されるし、登山者やハイカーにとっても、脅威を感じる場面は少なくないだろう。マスコミが報じる「トレイルランナーのマナー」や「自然保護上の問題」も、一部の極端な事例が過大に取り上げられたり、根拠が十分でないものが多いと指摘できるが、自然保護や安全上のコンフリクトがあることは事実だから、ルールの制定自体は、自然な流れと言えるだろう。またルールの内容も、ごみは捨てるな、動植物を大切にしよう、自然の音を聞こう（イヤホンで音楽を聴くな）、山に入る時には行く先を家族等に知らせよ、などマナーも含めた常識的なもので、今更という感がなくもない。

オリエンテーリング界ではほとんど注目されていないこの二つのルール制定だが、オリエンテーリングにも深く関係する可能性を持っている。オリエンテーリング自体、黎明期に未組織の活動者が増え、新聞にも「オリエンテーリング公害」として取り上げられた歴史がある。その後、大会時や練習時のトレイル利用については、相当程度の配慮がなされているが、昨今の大会直前中止・延期などの事態を見ていると、非占有空間を使うことでしか成り立たないオリエンテーリング競技において、他者とのコンフリクトがいつ競

東京都
自然公園
利用ルール

個人利用ルール

自然公園内で、誰もが気持ち良く自然に楽しみ・楽しむことができるよう次のルールを守りましょう。

全ての方へ

- 1 ごみは必ず持ち帰りましょう**
ごみのポイ捨ては、自然環境や景観、野生動物に影響を与えるおそれがあります。ごみは捨てずに、全て自宅まで持ち帰りましょう。
- 2 登山道を外れないようにしましょう**
踏みつけにより植生を傷めるおそれがあるので登山道などから外れないようにしましょう。
- 3 動植物、鉱物を大切にしましょう**
動植物や鉱物を採集・採取することは、貴重な自然資源を損うおそれがあるのでやめましょう。
- 4 野生動物にエサを与えたり、むやみに近づかないようにしましょう**
野生動物が人に慣れるなどの影響を及ぼすおそれがあるのでエサを与えるのはやめましょう。また、野生動物を威嚇・驚かせるなどの行動は昼夜問わずにやめましょう。
- 5 自然の音を聞きましょう**
嵐や沢の音、小鳥のさえずりなど自然公園には自然の音があふれています。イヤホンなどで耳を塞がず周りの音を聞きましょう。落石事故や他の利用者との接触事故を防ぐことにもつながります。
- 6 山に入るときは行き先を知らせておきましょう**
家族や知人などに行き先を告げたり、登山計画書を提出しておくことで安心です。特に単独行動の際は心掛けましょう。
- 7 集団で行動するときは周りに気を配りましょう**
集団で行動する時は、施設の独占など他の利用者に迷惑にならないように気を配りましょう。基本的には、すれ違いや追い越しは少人数を優先しましょう。

8 喫煙をするときは他の利用者に配慮しましょう
多くの方がきれいな空気を求めて自然公園に来ています。利用者が多い所で喫煙は避けるなど、他の利用者に配慮しましょう。また、吸い殻は捨てないようにしましょう。

9 登山道具使用の際は自然や施設を傷めないよう注意しましょう
ストックにはゴムキャップを付け、垂直以外のアイゼンの使用を控えるなど、登山道をやさしく利用しましょう。

10 生態系に影響を与えるおそれがある動植物を持ち込まないようにしましょう

その地域に生息・生育していない動植物の侵入を防ぐために、自然公園区域内での動植物の放置はやめましょう。また、自然公園に入る前に靴や衣類に付いた泥や種子などを取り除きましょう。

ペット同伴で訪れる方へ (犬、猫、その他の動物を連れて登山や観光をする方へ)

- 1 同伴する動物はしっかりと管理しましょう**
動物が苦手な人がいることを認識し、リードを使用する時は、リードを短く持ち、自分の脇を歩かせましょう。また、ペットの足や毛に付いた泥や糞は、生態系に影響を与えるおそれがあるため、持ち込まないように気を付けましょう。
- 2 病気のペットは同伴させないようにしましょう**
野生動物に影響を与えるおそれがあります。感染性のある病気のペットを自然公園内に連れて来ないようにしましょう。
- 3 フンの後始末は必ずしましょう**
野生動物に影響を与えるおそれがあり、また、衛生的にも好ましくないので、フンは飼い主が必ず持ち帰りましょう。

制定された東京都のルールの一部。内容はごく当たり前のことが書いてある

技の存続に重大な影響を与えないとも限らない。現在でも、ハイキング利用の多い里山で走るイベントはある。コンフリクトが問題にならないのは、単に競技人口が少ないこと、新入者のほとんどが大学生であり、比較的教育が行き届いているというだけの理由かもしれない。

なにより注目しなければならないのは、ルールの中に「登山道を外れないようにしましょう」という項目がある点だ。歩道の幅が懸念される箇所については歩道の踏み外しを規制することの必要性は、環境省のルールにも含まれている。オリエンテーリングイベントは（東京都の）自然公園や、国立公園内で開催されることは少ない。だが、たとえば菅平高原なら上信越国立公園の特別地域である。富士山麓も、普通地域ではあるが、国立公園内である。いずれのルールも無条件で活動を規制しているわけではない。

しかし、これまで自然の中で大規模に行うスポーツについて何もルールがなかった中でこうしたガイドラインが制定された時、行政は自然保護との関係で議論が生じた時、間違いなくこれらのルールを参照し、準用するだろう。一旦、世間の批判が加熱した時、それに対応するのは容易ではないことは、

今回のトレランのルール制定でも見たところである。そんな状態になっていないのは、一重にオリエンテーリングがマイナースポーツだからに過ぎない。

今回のルール制定は対岸の火事どころか、火の粉は今にも飛んできそうなのだ。今一度、オリエンテーリングと自然や他の活動者との関係を見直す時期がやってきている。

◆参考:

環境省のガイドライン:

http://www.env.go.jp/nature/trail_run/onf/trailrun_np.pdf

東京都のルール:

<http://www.metro.tokyo.jp/INET/KEIKA/KU/2015/03/70p3u400.htm>



愛好者が急増しているトレランだが、自然へのインパクトや他の活動者とのコンフリクトが懸念されている。オリエンテーリングはどうだろうか？そう、我が身を振り返ってみることが必要だ

頂きへ

8000m以上の高山は死の領域と呼ばれる。薄い酸素、低温や過酷な天候、ちょっとしたミスが命とり、いやミスがなくても力尽きて死ぬ人も少なくない。しかも、遺体を降ろすことも大変なので、ほとんどの遺体はそのまま放置されている。それでもエベレストは快適なハイウェーのようにザイルが張り巡らされ、数千人がすでに登頂している。強力なサポートによって登攀する一般登山者も少なくない。その一方で、死の領域で、無酸素で、ザイルすらつけずに初登のルートに挑戦する登山家たちがいる。彼らは死と隣り合わせのその行為が怖くないのだろうか？

そんな疑問からスタートした研究結果を、昨年8月にまとめて体育学の専門誌に発表した。対象にしたのは、国際的な賞も受賞する登山家たちで、「もう助からないから家族にメッセージを残せ」と言われた人もいれば、夫婦ともに優れた登山家だが、「二人とも死ぬのもなんだからなあ」と、ザイルも結ばずに登り、敗退で両手両足合わせて18本の指を失った登山家もいる。

不思議なことに、彼らのほとんどが「自分は臆病だ」「自分は慎重だ」と言う。最初、この言葉は禅問答のような了解不能な言葉に思われた。だが、彼らの言葉を分析し、意味づけしていくうちに、彼らは自然環境が不確実性に満ちた場所であり、挑戦する以上リスクが回避しきれないこと、それ故の不安や臆病さを持っていることが分かってきた。初登のルートに登る魅力にとりつかれ、挑戦への強いモチベーションを持っていても、その環境が致命的なリスクを内在していることに変わりない。リスクに対する感覚を失ってしまえば、命がいくつあっても足りないだろう。登る以上は大丈夫だと思いたい。だが、その気持ちに打ち勝って、不安を持ち続け、臆病に振る舞ってこそ生き続けることができる。

不確実な環境の中で、彼らは計画とオンサイト（その場）でのリスクマネジメントも、巧妙に組み合わせていた。不確実な環境では、常にリスクは変化する。じっと考えていてもそのリスクが許容できるのかそうでないのかに答えることはできない。敢えて…することで、その動きの中からリスクに対する新たな情報が得られる。それが蛮勇にならない程度のリスクをコントロールしつつ、新たに得られる情報に常に敏感になりながらリスクマネジメントをする。彼らのリスクマネジメントはそのように特徴づけることができた。

オリエンテーリングでは、命を懸けることはないけれども、優れた競技者がエイミングオフやコントロールを特徴によって「困る」ことで、致命的な事態を避けつつも、常に周囲への注意を怠らずに目的地に向かう。その中で競技にとっての致命的なリスクを避けるように「頭の中のベルを鳴らす」（ペッテル・トールセン：1997年の世界チャンピオン）ことが推奨される。それはオンサイトでのリスクに敏感になれという警句に他ならない。身体へのリスクには差こそあれ、オリエンテーリングが挑むのも（地図情報だけでは）完全に不確実性を排除できない自然である。似たような不確実性の中で、同じような行動が身につくのだろう。

この研究をタネにして、登山におけるリスクマネジメントの本を執筆した。クライマーのリスクに対する捉えや、その方略は、ナビゲーションのエキスパートである自分にとってそう遠くないところにあった。だが、リスクマネジメントについて誰がどう責任を分担すべきなのか。あるいは高いリスクに取り組むことが活動者に何をもたらすかといった、社会との関わりで登山のリスクを整理することは未知の領域だった。それを整理し、解答への道筋を見つける作業は、高所登山にも似て辛く厳しかった。頂の素晴らしさは十分承知している。登頂することでその魅力を十分に味わいたい、あるいは多くの人に伝えたい、そう思いながら過酷な環境に対峙して高所に登るクライマーの心境はこんなものだろうか？

多くの人に支えられたその冒険は終わり、後はリスクのない林道を歩けば麓にたどりつく。今晚達成感に浸る民宿の屋根もすぐそこに見えている。その成果が、山の悲劇を減らすだけでなく、そのプロセスにおいてアウトドアの楽しみを増やすことに貢献することを期待したい。



エキストリームなアウトドアも盛んになっているし、リスクへの敏感さも増している。だが、両者はうまくかみ合っていないのでは？その思いからタイトルを「山のリスクに向き合うために」とした。

トレラン協議会

4月27日、「日本トレイルランナーズ協会」設立に向けての会合が、東京都の大崎にある立正大学で開催された。

View59でも触れたように、トレイルランニングは世間からの逆風の中であり、トレイルランニングを健全に継続する上での対策は待たなしの状況であった。一方で、トレイルランニング競技を組織化しようとした日本山岳協会も、未だに全国組織化の道を探しあぐねている。日山協による組織化に期待する人も、それに対して懐疑的な人も、もう待っていられない。二つの団体が立ち上がって覇権を競うような状態になれば、一般活動者にとってはデメリットしかない。そのリスクを考慮に入れても、団体を設立せざるを得なかったのというのが本音のところだろう。

この団体の設立において、オリエンテーリング関係者は最初から主導的や役割を演じた。日本オリエンテーリング協会会長の山西哲郎氏は、もともと市民ランナーの教祖的存在であり、1980年代から自然の中でのランニングの魅力と効用を唱えていた。様々な思惑から動きの鈍いトレイルランニング関係者を説得し、組織立ち上げを山西氏が主導したのは、ある意味当然のことかもしれない。しかし、多くのステークスホルダーがいるこの組織の立ち上げがスムーズに進んだのも、オリエンテーリング関係者である、木村佳司氏や

船橋昭一氏の事務的なサポートがあればこそであった。

私自身、山西氏の誘いでこの組織の立ち上げのお手伝いをした。自分でもトレイルランニングをやるし、イベントの運営をする。その一方で、トレイルランニングは自分の活動のマイナーな部分を占めるに過ぎないし、何よりアイデンティティがそこにはない。それにも関わらず、この組織設立に深く関わったのには、いくつかあるが、最大の理由は「異業種交流」である。

日本では「登山」と「ロッククライミング」は別種のスポーツに近く、特にインドアでのクライミングをする人の中には「山に登ったことありません」という人も、最近では少なくないようだ。だが、もともとは山に登りたい、そして、そのためには安全確保が不可欠であるという状況があって、そこにロープで確保されながら登るロッククライミングが必要になる。ナビゲーションも同じだ。自然の中に行きたい場所がある。だが、自然の中は目印が不十分で、迷いやすい。目的を達成するためにナビゲーションが必要となり、スポーツ化されればオリエンテーリングになる。

本来は「自然に関わる」という行為の中に「登山」「クライミング」「ナビゲーション・スポーツ」といった活動が生まれ、それらは元々連続したものであったはずだ。だが、それぞれのスポーツの先鋭化に伴い、それぞれが独立性を強めていく。それはスポーツ発展の必然の過程ではあるが、スキルが偏ったものになり、楽しみが限定されるというデメリットももたらす。

登山やトレランをする人がナビゲーションスキルを身につければ、もっと楽しみを安全に広げることができるだろう。オリエンティアが自然の中の生活技術やファーストエイドを身につければもっと安心して活動ができるだろう。トップを競う一部の競技者を除けば、異業種で交流することで、楽しみも面白さもより広く、深くなるはずである。

トップ競技者にしても、それぞれに人口の少ない中で、他のスポーツとの交流は、刺激、新しいヒント、リフレッシュなど多くのものをもたらしてくれる可能性がある。トレイルランニングの組織に関与することは、こうした異業種交流のチャンスを大きく増やしてくれるだろう。

もともと、オリエンテーリングは走るとナビゲーションという二つのスキ

ルを同時に要求される。また走るにしても、スピードはもちろん、素早く登るために筋力、不整地を走るバランスやスキルなども要求される。ある意味、面倒くさい競技である。ならば、それを逆手にとって、多くの近接スポーツと交流することが可能になるし、なるべきなのではないだろうか。それは遠回りのように見えても、普及の重要な武器になる。手を抜きたくなる自分を、そうやって叱咤激励する。

荏原今昔物語

3年ほど前、TBS 開局 60 周年記念の超大作時代劇「仁」が放映された。現代の外科医が江戸末期にタイムスリップし、満足な医療機器もない中、懸命に市井の人々を救おうと苦悩するドラマだ。タイトルロールでは、現代の東京に明治初期（つまりはほとんど江戸期だ）の東京の写真がオーバーラップして映し出される。高層建築に覆われた現代の東京からは想像もつかない質素な町並みとのどかな風景が、ノスタルジアを誘う。登場人物の花魁「野風」の大ファンだった僕は、ありえないことを承知でそんな世界にタイムスリップしてみたいと思った。ところが、江戸末期にタイムスリップする方法が存在していたのだ。それが「ロゲイニングイベント今昔物語」であった。

今昔物語は、野川のカルガモのおとうさんこと後閑茂弘氏が昨年からスタートしたイレギュラーイベントである。なにが「今昔」かというと、今の東京を昔の地図を使って走ろうというイベントだからだ。クラスは二つ。一般クラスと地図ヲタククラスである。地図ヲタククラスに配られるのは大正初期の地形図である。今昔物語が対象とするのは東京郊外、それもかなり西か南に離れているので、一部の鉄道こそ走っているが、景観はほとんど江戸末期だ。その地図に記されたポイントを巡るロゲイニングなのだ。



大正期の地図を見ながら走ると地形に敏感になれる。「谷があるはず」と思った先に緩やかにくぼみが見えると、にんまりしてしまう

図に今回のロゲイニングで使われた地図の一部を示した。併せて現代の地図も示す。「いったい、こんな地図でナビゲーションができるのか？」そう思う向きも多いだろう。確かに、現代の地図は一面の市街地なのに対して、当時の地図ではのどかな田園風景が広がっている。建物はもちろん全く違う。だが、当時の地図を見ると集落がなぜそこに立地したかが分かる。その集落のおそらく中心だろう位置に駐在所が設置され、それが今に残っているであろう。道路だって全然違うように見える。だがよく見てみると、屈曲した道路には当時の名残が残っている。現代の地形図では無数の道路に埋もれて見えないものが、当時の地図ではクリアに見え、またそれを現地を確認することができる。

極めつけは地形だ。現代の地図からは読み取れない地形が、当時のシンプルな地図からは容易に読み取ることができる。あるいは当時の地形図にも等高線では表現されていない微高地が、土地利用や集落の立地から読み取ることができる。そして、それらの地形のほとんどが、現在でもこの地域には残っているのだ。



東京の市街の中に、5、6世紀に遡れる史跡が「塚」として残っている。かつては台地上にある緩やかな谷に面した微高地の村はずれにあったこの塚は、今でも緩やかな坂の上にある。

大正期の地形図から地形を読み取る。ナビゲーションのために、参加者はその地形を風景の中から読み取ろうとする。もちろん、そこには家屋やビルが密集していて、その下にある大地を直接見ることはできない。だが、坂はどうだ。東京は坂の多い都市だが、その多くが今も残っている。そして坂があれば、そこに尾根や段丘があることが分かる。あるいは暗渠はどうだ。小河川の多くが今や道路や公園の下だ。だが暗渠マニアという言葉があるように、緑道や独特の線形を持った道路、あるいはそこだけ違う舗装などからそ



大正期の地図。一つ前の写真は 50 番。この地図から地形を読み解き、現代に残る道を見つけるのはちょっとした快感である

現代の地図。道がごちゃごちゃしていて、よほど大正期の地図の方が読みやすいと思うが…

の暗渠、ひいては昔の河川を読み取ることができる。河川があれば、そこには谷があったはずだ。こうして大正の地形を現代の景観から読み取ることができるのだ。

地形を手がかりにナビゲーションをするうちに、いつしか参加者の目がかつての東京の地形をビルの背後に読み取り、そして当時の地図から読み取った景観が目前の風景に融合していく。ナビゲーションという媒介によって、比喩以上に私たちは当時の東京にタイムスリップしていくことができる。これは、地形の起伏に富む東京、その地形が残る時期に作られた正確な地図、そして私達のナビゲーションスキル、この3つが揃ってこそ生まれる奇跡のタイムスリップである。

このイベントはノスタルジックな意味だけで素晴らしいのではない。建物も道の多くも役に立たない大正期の地図でナビゲーションしようとするれば、必然的に地形に頼らざるを得ない。頼りない地図情報を使うために、エイミングオフ、コントロールを囲う、チェックポイントの設定など、ありとあら

ゆるナビゲーションスキルが要求される。北欧の大自然（地形的にはむしろ東欧の森か？）でしか要求されないナビゲーションスキルがごく自然に必要とされる。数十万円もかけて遠征してようやく得られるナビゲーションの楽しみが、たかだか数百円での東京で経験できる。

ノスタルジアに浸りたい人、1970 年代の里山でのオリエンテーリングが懐かしい人、ナビゲーションの練習をしたい人、北欧に通用するオリエンテーリングスキルを高めたいが遠征費が工面できない人、今昔ロゲイニングは、全ての人のニーズを満たすイベントである。

(村越 真)